

天照大御神
火瓊瓊杵

宮の宇都(高千穂宮)高原町

一八〇年代後半～二二〇年代前半

二二〇年代前半

せんだい

↓笠沙宮↓西都（西都市）

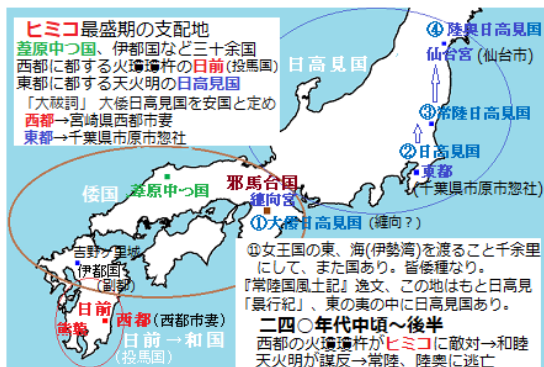
高千穂宮②
都城市都島

高千穂宮③ 霧島市隼人町

二五〇年代前半～二七〇年代前半

二七〇年代前半～二八〇年代前半

二八〇年代前半～二八〇年代中頃



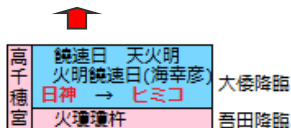
日高見国の変遷

■大倭・日高見国① 二二〇年代前半～二二〇年代末（纏向地区）
 東都の日高見国② 二二〇年代末～二四〇年代後半（千葉県市）
 常陸信太の日高見国③ 二四〇年代後半
 陸奥仙台宮の日高見国④ ↓三〇〇年頃、埴順  日本武尊の日

邪馬台国〔瑞穂の厳之国王朝↓天(厳)之国王朝(倭)↓日本朝に発展〕

景行・仲哀の熊襲征伐

↓二八〇年前後、景行は囚われ、仲哀は敗退



箸墓古墳の変遷

I 円形墳の築造（二四八、九年）、魏の役人張政が見守る中、百余人が殉葬された、「倭人伝」に塚高さの記載がない↓当初のヒミコの墓は円墳

II 五段重ねの石積み円墳に造り変え（二五〇年頃）、

(1)張政の帰国後（二五〇年頃）、円墳の周濠（内濠）を掘った残土で以て、五段重ねの石積み円墳に築かれた。その間、ヒミコの亡骸はホケノ山古墳に納められた。

(2)ヒミコの亡骸は、ホケノ山古墳から円墳最上段に埋葬された。その際、吉備に由来する特殊器台形埴輪・特殊壺が円墳上に副えられた。

III 帆立貝形前方後円墳に造り変え（二六〇年代後半）

(1)トヨの朝貢後、外濠を掘った残土で、帆立貝形前方後円墳に造り変え。(2)火明饒速日はこれを泰山・梁父山に見立てて郊祭し、天神に昇った。(3)二七〇年代前半、女王トヨが逝き、ホケノ山古墳に埋葬。(大神神社↓ホケノ山古墳が豊鍬入姫の墓と伝える)

IV バチ形前方後円墳に造り変え（二七〇年代前半）

(1)その数か月後、倭迹迹日百襲姫が逝去し、その亡骸はホケノ山古墳に仮葬された。

(2)バチ形方墳部が継ぎ足され、倭迹迹日百襲姫がそこに埋葬された。

(3)方墳表面が大坂山から運んできた石で覆われた。↓箸墓伝説

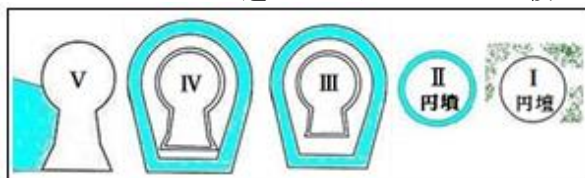
V バチ形を伸長した前方後円墳に造り変え（三〇〇～三〇四年初め）

(1)古墳の西を掘り起こし、ため池（大池）がつくられた。

(2)濠内の水がため池に引かれた後、内外の濠がため池を掘った残土で以て埋め戻された。

(3)バチ形の方墳部がため池を掘った残土で、さらに継ぎ足された。(4)女王トヨの亡骸も、ホケノ山古墳からバチ形部に遷された。(5)石葺きの方墳全体がため池を掘った残土で、うっすらと覆われた。

(6)直後、二重口縁の壺形埴輪（三〇〇年前後の吉備系土器）がトヨの亡骸真上に副えられた。



神武東征
～285年

邪馬台国<倭国>の副都時代
「倭人伝」記載の伊都国

伊都国/
王朝期
オロチ蔵之國
王朝分国期

吉野ヶ里遺跡（佐賀県神埼市、吉野ヶ里町）の変遷

前四世紀頃、丘陵南に集落が出現した。弥生前期中頃、吉野ヶ里丘陵の南端近くに四畝の環壕集落ができた。その後、丘陵裾部に大集落が発展し、丘陵全体を囲む環壕が後期前半に完成した。その大きさは二五畝もある。前期後半から後期前半にかけて、六百畝に及ぶ列状集団墓地に万を越す甕棺群、中期前半の巨大な方形墳丘墓が築かれた。そこには、三雲遺跡（前一世紀後半）より古い形の甕棺五基が埋葬されており、その四基から有柄細形銅剣一・細形銅剣三が出た。

前一世紀中頃、糸島平野に撃つて出て豊葦原中国王朝を打倒し、伊都国王朝を建てたらしい。後期（倭奴国王朝草創期）、丘陵全体を巡る総延長二・五^{キロメートル}の外壕が完成した。外壕の囲む範囲は四〇畝に及ぶ。V字形に掘り下げた壕内外に、木柵、土塁、逆茂木、壕内の各所に見張り用や攻撃用の櫓が設置され、外壕内に二つの内壕ができた。

後期後半（倭国大乱時）→終末期（日本朝期）、望楼（物見櫓）を備えた外壕内の内壕内外に二つの建物群（北内郭、南内郭）が築かれた。北内郭から祭殿らしき大型建物跡、南内郭からは竪穴住居跡が見つかっている。ここに、天之国率いる邪馬台国群が大挙進駐してきたらしい。

南内郭西方からは大規模な高床倉庫群跡、神社跡地周辺からも石棺墓十八の存在が確認されている。全体の広さは二五畝もあって、当時として最大である。

弥生終末期→古墳時代初め（神武東征時）、壕は大量の土器で埋め尽くされ、集落はほぼ消滅した。近畿や地方の環壕集落も、この時期に同様の経過を辿った。

「倭人伝」、「伊都国に到る。・千余戸あり。世よ王あるも、皆女王国に統属し、郡使の往来に常に駐まる所なり」、「女王国以北には、特に一大率を置き、諸国を檢察せしむ。諸国、これを畏ればかる。常に伊都国に治し、国中において刺史の如きあり」

☆魏では、天（天子を指す語）や臺（天子が政を行う御殿）は天子のみに許される漢字だった故、「倭人伝」の編者は「天」を一大に、「臺（台）」を壺にあてる他なかったのである。

神武天皇の郊祭（箸墓に眠るヒミコ御霊を天照大御神御魂として鳥見祭場に遷し、皇祖天神に奉る祭祀）

①三〇一年（辛酉年）元旦、磐余彦は建国の儀を催した後、自ら神日本磐余彦火火出見と語って初代天皇（神武天皇）に即位した。続いて、皇天を天に配する準備に取りかかった。

ヒミコ陵については、そのまま残しておく理由などなかった。そこで彼は、こう決断した次第だ。

一、皇天二神（日神と高皇産霊）を称えて鳥見山麓に新たな御陵（桜井茶臼山古墳）を築く。

一、方墳を継ぎ足したヒミコ陵に女王トヨも合葬し、倭迹迹日百襲姫陵のごとく思わせておく。

②三〇四年二月二三日、鳥見山北麓に皇天御陵が完成すると、その円墳上に霊時を造営して、高皇産霊に代わって郊祭に臨んだ。即ち、箸墓円墳に眠るヒミコ御霊を天照大御神御魂として霊時に移し祭ると同時に、石塚古墳の天照大神御霊も高皇産霊御魂として招来し、共に天（日天神）に配したのだ。ついで神璽の鏡剣を捧げ持ちつつ、お札の言葉と決意を申し述べた。

「我が皇祖の御魂は、日の光となって天より降り賜い、私の身を金色の光で照らして加護して下さった。今、数々の敵を平定して、天下も平穩に治まっております。そこで皇天を天に配して、その教えるところに永久に従いたいと誓った次第です」

つまり、神武は柴を勢いよく燃やす中で封禪しながらに郊祭して、その高煙が天に通じたところでお札と言葉を申し述べるとともに、皇天二神を天に配して皇祖天神に奉ったのだ。

『古語拾遺』、「まつりのにわ 霊時とみを鳥見山の中に立つ。天富命、幣みでぐらを陳ねて祝詞のりとして皇天を禋祀あまつかみり、・・群望を遍りたまう。然れば、天照大神（日神と高皇産霊）は、これ祖これ宗、尊きことならび無し」

『後漢書』「光武帝紀」、「（二五年）六月、皇帝の位に即く。燔燎して天に告げ（柴を焚いて祭り、高煙が天に通じたところで天に報告）、・・ここに於いて建元して建武と為し、天下に大赦し、・・」

鳥見山北麓には、四世紀初頭に造営された日向型の帝王級前方後円墳が鎮座する。桜井茶臼山古墳と呼ばれるそれには、樹齡千年以上の木棺が安置されていて、木棺内外に三角縁神獸鏡・大型内行花文鏡・方格規矩鏡など八一面の銅鏡、曲玉・鉄剣、王権を示す碧玉製の玉杖・玉葉が副えられていた。

歴代ヒミコの墓

〈歴代のヒミコ〉

〈箸墓の変遷〉

①ヒミコ（日神の天照大御神、一六五年頃生）享年八〇余

②トヨ（豊鍬入姫、二三六六年頃生）

③倭迹迹日百襲姫（二三〇年代中頃生）

④神功（二六五年頃生）

⑤倭（迹迹）姫（二四〇年頃生）

二四七年頃、天照大御神と共に伊勢へ（在位）二八五頃〜二九八年頃

二四八、九年

「倭人伝」径百余歩
／殉葬百余入

円壇 円壇に造り替え

二六〇年代末

饒速日天神に昇る 箸墓伝説
（天照国照彦火明饒速日命）

帆立貝に造る

二七〇年代前半

箸墓伝説

帆立貝に造る

三〇一年

神武即位

鳥見山で郊祭

三〇四年

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

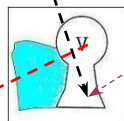
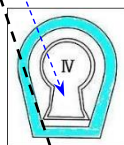
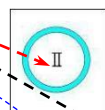
箸墓伝説

箸墓伝説

箸墓伝説

纏向石塚古墳の天照大神御霊

ヒミコの寿陵
／豊鍬入姫の墓



一、二 壇

張政の帰国後
五段積み円壇

帆立貝形
方墳

バチ形
方墳

バチ形方墳伸張

病で退位 享年四〇弱？

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位

享年四〇位



桜井茶臼山古墳

日神御魂として招来
（三〇〇年過ぎ）

日神夫妻御魂を合葬
／皇祖天神に奉る

日神夫妻御魂を合葬
／皇祖天神に奉る

日神夫妻御魂を合葬
／皇祖天神に奉る

日神夫妻御魂を合葬
／皇祖天神に奉る

日神夫妻御魂を合葬
／皇祖天神に奉る

日神夫妻御魂を合葬
／皇祖天神に奉る

伊勢神宮の祭祀変遷

二四七年 二四八年

纏向上之宮

女王の伊勢遷座

女王逝去

日本武北伐時

大和朝廷成立

雄略期

二四〇年代末

二九〇年代末

三〇一年頃

五世紀後半

五十鈴の川上

正宮東半分

五十鈴の川上

多気郡明和町の

笠縫呂磯城神籬

齋宮 (大御神の御殿)

大御神の宮?

齋宮 (倭姫の御殿)

齋宮 (齋王御殿)

司祭

天照大御神

豊鍬入姫

祭神

高皇產靈

天照大神

天照皇太神

天照大神荒魂

祭神

天璽の天叢雲劍

祭器

檜原神社

祭神

昭和期創祀

天照大神若御魂

五十鈴宮 (祭殿)

天照大御神

倭姫/中臣

祭神

高皇產靈

祭器

真経津鏡

檜御柱

正宮西半分

渡遇宮

磯宮

天照大神の始めて天より降ります処

天照大神の始めて天より降ります処

天照大神

祭神

祭器

伊勢神宮

倭姫

中臣

中臣

伊勢大神

正宮

天叢雲劍

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

大御神の宮

中臣

中臣

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

皇大神宮

皇女齋王

中臣

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

皇大神宮

皇女齋王

中臣

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

〔雄略期〕 丹波比治の眞名井に坐す御饌津神の豊受皇太神、豊受大神、豊受姫……→山田原の豊受大神宮 外宮

『邪馬台三国志』歴史物語編下 目次

◇倭国／倭奴国の国のかたち ◇邪馬台国はどこか ◇本書の王系譜
 ◇縄文期の東西文化 ◇水田稲作の伝播 ◇中国神話と古代史／策封のかたち ◇インド古代史

倭国の生い立ち ◇封禪・郊祭と蓬萊三島の仙人 ◇先祖祭祀と宗教

●那珂つ国 ◇海神と不老長寿の仙薬・蓬萊郷づくり ●天之国とオロチ敵之国王朝 ●倭国王朝の建国

倭奴国王朝 ●豊葦原中つ国と伊都国の王朝 ◇漢の西域支配／クシヤン朝・バルティア国の歴史

●倭奴国王朝／安曇族の渡来 ◇海神族、呉太伯ら子孫、越オロチ族、安曇族の伝統と風習

倭国大乱と邪馬台国 ◇南伝仏教の東アジア流入 ◇神国と常世づくりと伊婁諾 ◇熊族／熊曾（熊襲）の遠祖

◇熊野権現 ◇牛頭天王と磐座／大穴持と素戔鳴 ◇白髭神社と謡曲白髭／蓬萊郷と仏法・山王信仰の聖地

●豊受皇太神 ●倭国大乱 ●伊婁諾の南遷 ●二人の天照大（御）神 ◇太陽（日）神と牛頭天王の源流

東西の王朝 ●日神の出現 ●天石窟 ●オロチ退治 ●天日槍襲来

●天照大神、高千穂宮へ／天孫饒速日の天降り ●葦原中つ国平定 ●天孫瓊瓊杵の出現

●皇孫火瓊瓊杵の天降りと日限 ●日神の畿内遷座 ●天照大神の湖西高島宮と天成神道

倭の女王 ●倭の女王ヒミコと纏向上之宮／皇孫火瓊瓊杵の日前国西都と天孫天火明の日高見国東都

●皇子の交換 ●女王の朝貢 ●海幸彦と山幸彦

●内部抗争 ●火明饒速日（海幸彦）の天降り ●女王の伊勢遷座

日本王朝と日前の対立 ●女王トヨ ●一都七道制 ●天神火明饒速日 ●太子磐余彦 ●景行の熊襲征伐

●和王 磐余彦（山幸彦の孫） ●仲哀の熊襲征伐

天下は一つ、家は一つ（神武東征）

●生駒の敗北 ●熊野上陸／熊野権現の神倉山垂迹 ●東征出発 ●筑紫国の奪還 ●新羅遠征 ●吉備征伐／高島宮／出雲征伐

大和朝廷の成立 ●橿原宮 ●日本武尊の北伐 ●大和朝廷のはじまり1 ●大和朝廷のはじまり2

●皇祖天神に奉る郊祭 ◇天璽の鏡と神璽の鏡三面 ◇十握剣の変転／石上神宮と鹿島神宮の祭祀変遷

◇邪馬台国の興亡史概略 ◇日矛の変遷 ◇日限・日前・熊野家統合と先祖祭祀復興 ◇家長と祭器／祭器の変遷

◇箸墓古墳の変遷／歴代ヒミコの墓 ◇向津姫（日神）誕生後の歴史と年代 ◇主要人物の生きた推定年代

天下は一つ、家は一つ（神武東征）

●東征出發

いわれびこ

同じ頃、磐余彦いわれびこは仲哀が急遽築いた西海道の都、橿日宮かしひを不意に打ちする作戦を練りあげていた。

「敵中に密使を放つて内部分裂を煽る中、五瀬軍が肥後から北上して敵を引き寄せる。その裏で、磐余彦率いる水軍が関門海峡をひそかに抜けて遠賀川河口に上陸し、背後から檀日宮を襲う」という極秘作戦だ。

この作戦にそつて、多数の密使が筑紫国に放たれた。ある者は武装蜂起を煽り、武内宿禰に近づいた者は内通と寝返りを囁き、海神大神や博多住吉大神の陣中に潜り込んだ密使は、

「今こそ、海を渡つて新羅に攻め込み、ヒミコや住吉大神の無念を晴らしましょうぞ」

と言ひ触らしては、敵の目を北の海に向けさせた。その結果、住吉族の誰もが身内同志の殺戮を嫌うあまり、新羅征伐に同調した。彼らは身を挺して女王にこう直訴した。

「ヒミコの遺志は、日前と團結して新羅に天罰を与えることにありました。今、女王が住吉軍を率いて新羅に渡海し、新羅王に日矛など熊野家神宝をとくと拝ませるだけで、熊野櫛御氣野親子（素戔鳴と天日槍）を慕ってきた新羅王はハタとひれ伏し、ヒミコの使節を襲つた件についても深々と謝罪するはずです。」

すれば、ヒミコの遺志を果たすことになります。我らは本宮にあつて女王を警護すると同時に、練りに練った秘策を講じつつ戦わずして勝つてみせましようぞ」

神功自身もヒミコと並んで崇敬されたいと常々念じていたから、この訴えを聞いた途端に、ヒミコの遺志を遂げてみたい欲に駆られてしまった。

これが発端となつて、橿日宮では「熊襲征伐を一から考え直せ」という声が方々で湧き起こつた。この勢力が神功の許に集まつて来ては、仲哀方と対立した。

仲哀に愛想が尽きたのは、神功だけではなかつた。父にひたすら忠実でありたいと願う小碓も、「父の詔は、何としても実現せねばならぬ。こうなつたら、身を挺してでも熊襲（川上）タケルに近づき、この男と刺し違える他はない」

と思いつめていた。皇子は、川上タケルが霧島山麗の山間で新築の祝宴を催す噂を耳にするや、そこに向かつて行つた。

当初、彼は遠くから宴席の様子を眺めているだけだったが、やがて伊勢斎宮を勤める叔母、倭姫から賜つた巫女の衣裳に身を包むや、ふくら脛に短剣を忍ばせ、宴をとりもつ女たちの中に紛れ込んだ。人並外れて大柄な巫女は、その目立つ容姿から皆の衆目を集めた。

真つ先に巫女に近づいてきたのは、川上タケルだった。彼は巫女の手を握りしめて傍に侍らせ、その体をま探つては酒を飲み交わしていた。

時が過ぎて一人二人と席を立ち、さらに深々と夜が更けて人影がまばらになると、宴席に残る者は酔いつぶれた川上一族だけとなつた。

その時を見計らつて、巫女姿の皇子は隠し持った剣を取り出すなり、いきなり川上タケルの胸をめがけて突き刺した。川上タケルは苦しみながらも、

「我らよりも強い男が、大倭にいる。これより日本武尊の名を奉らう」
やまとたけのみこと

と言つて息を引き取つた。それまで小碓と呼ばれてきた皇子は、この時から日本武と名のつた。だがこの功も空しく、捕らわれの身となつて磐余彦の許に送られてきた。

〔都城市莊内に伝わる熊襲踊り〕、〈高い丘にあら熊襲じやないか 鬼か奇人かばけものか・・・〉と歌いながら踊る熊襲踊りは、日本武尊が霧島山麓の熊襲を討つた伝承に由来するという。

〔行滕（むかばき）山〕（宮崎県延岡市）、日本武尊は川上タケルを討つため、延岡から五ヶ瀬川沿いに進むと、馬具の滕に似た山が目にとまつたことで、行滕山と名づけた。その後、豊後国に帰つて宮居を構えた。人々はその武宮と呼んだという。

磐余彦は敵状を聞き出すと、皇宮屋に兄や臣下らを集めて軍議を開き、決意のほどを示した。

「昔、日神と高皇産霊は、火瓊瓊杵に葦原中つ国も豊葦原瑞穂国も譲ると言われたが、この約束は反故にされた。天孫はそれでも正道を歩んで善政に心がけ、ひたすらこの国の統治に励んで来られた。

然るに、邪馬台国では善政が行き届かず、所領争いも絶えなかった。それは、武力に頼るばかりで祖父の命までつけ狙つた天鹿兎山が、火天神と仰がれたことに始まる。

この時から、あの国の者は徳と正義を忘れて怨念や我欲で事を決し、もめごとの解決も力に頼つた。塩椎老の言によると、

『その後、日前からその国に天降つた者がいる』という。それは火明饒速日（「記紀」の饒速日）のことだが、彼も大倭の地が天下の都に相応しいにもかかわらず、三嶋流神国づくりに現を抜かしてきた上に、確たる瑞祥もないまま郊祭して日と瑞穂の天神に居座つてきた。政においても徳政を疎んじて事あるごとに鉄剣を振りかざし、我らに二度も兵を差し向けた。

私が兵を揃えて東征しようとするのは、現実と乖離した神国三昧や、欲と感情にまみれた日本朝